箱館奉行所と函館開港（その 3）

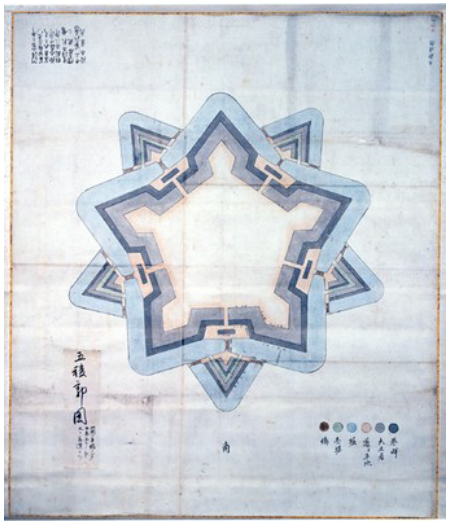
中尾 仁彦

箱館歴史散歩の会主宰、第1回 函館検定 上級試験合格、ＮＨＫラジオ「どどんと道南ラジオ」に月１回レギュラー出演中。著書「箱館はじめて物語」（まちセン内 cafe Drip Drop で絶賛好評発売中）

武田斐三郎と五稜郭設計

設計には、大洲藩（愛媛県）出身の蘭学者・武田斐三郎があたります。1855（安政 2）年、和親条約を締結していなかったフランスのコンスタンチーヌ号など 3 艘の軍艦が、傷病を負った乗組員の治療を求めて箱館港に緊急入港。箱館奉行・竹内保徳は幕府の許可を得ることなく、人道上の問題として実行寺に 70 人を入院させます。その際、武田斐三郎はコンスタンチーヌ号副艦長から、星型をした郭内に都市を取り込んだパリ郊外にある城塞都市の絵図を示され、五稜郭の原案に取り入れたと言われております。

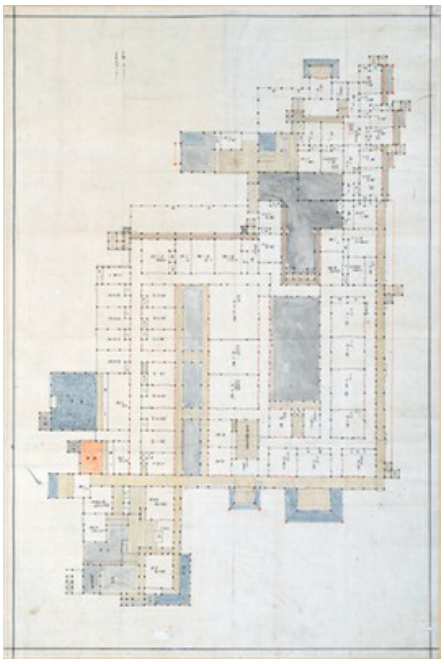
五稜郭は、形状からどの方向からでも敵に応戦できる強固な軍事施設とされますが、実際は政治的・外交的機能を持つお役所のため、大砲は備えていませんでした。日本で最初の西洋式城郭ではあるが、ヨーロッパで 16 世紀には存在した旧式の西洋式城郭をなぜ武田斐三郎が建造したのかという意見が一部にあります。それは、諸外国に日本の軍事力と技術力を誇示し、外交を円滑に進めることに大きな意義があったからなのです。それだけ日本と外国との差はあらゆる面で歴然で、その後の商取引においても不当な取引が長く続きました。



写真：五稜郭内庁舎平面図
（函館市中央図書館所蔵）

箱館奉行所建築工事

奉行所の建築は中川伝蔵（代人父源左衛門）が請け負い、大工棟梁を務めたのは大岡助右衛門です。



写真：「五稜郭初度設計図」
（市立函館博物館所蔵）

大岡は箱館戦争の終戦後、侠客の柳川熊吉と協力し、官軍の命に逆らって、路上に捨て置かれた榎本軍兵の死体を収容した人物として知られています。1861（文久元）年に建築は開始され、建材は秋田能代の松、杉、栗を使用。能代で加工した後に箱館へ運び、組み立てるという、現代でも通用するノックダウン方式でコストダウンが図られました。

建物は、東西最大の長さ約 97 メートル、南北最大の長さ約 59 メートル、建物面積約 2658 平方メートル（約 800 坪）と広大です。総部屋数 70 室の 3 分の 2 は執務室が占め、毎日 200 人以上の役人が勤務し、残りは奉行とその家族の居住スペースでした。このほか、武器庫、食料庫、稽古場、馬厩、仮牢など 20 数棟の付属施設もありました。また、裏門橋の後方に、同心長屋 50 軒、役宅 46 軒の合計約 100 軒が建ち並んでいましたが、箱館戦争時に榎本軍によって放火され焼失しました。

築城と同時に境界と砲弾遮蔽のため、郭内に 100 本（88 本現存）、周囲に数千本の赤松が移植されましたが（市立函館高校、大妻高校付近に一部現存）、箱館戦争時はまだ伸びず何の役にも立ちませんでした。

蝦夷地始まって以来の大型工事ゆえに、箱館の商人・杉浦嘉七、山田寿兵衛などが全国から石工、人夫 5000－6000 人を集め、裏門橋付近には湯屋、料理屋が開店するなど、箱館の経済に大いに貢献しました。

「函館観光情報サイト hakobura」より転載